

子どもの日本語教育研究会第3回大会
2018年3月3日(土)於:聖心女子大学

パネルセッション1

**多様な子どもたちが生きる社会
で日本語教育に何ができるか
—地域での実践から考える
「生きる力を持つためのことば」—**

池上摩希子 (早稲田大学)

矢崎 理恵

(社会福祉法人さぽうと21・学習支援室コーディネーター)

唐木澤みどり、益子亜明

(NPO法人豊島子どもWAKUWAKUネットワーク・ボランティア)

本パネルの構成

1. はじめに — 本パネルの目的 —

2. 事例報告

事例1: 「さぽうと21」より

事例2: 「豊島子どもWAKUWAKU

ネットワーク」より

3. まとめ — 改めて、課題は？ —

4. フロアとの協議



1. はじめに

— 本パネルの目的 —

- 「日本で生きる多様な言語文化背景を持つ子どもたち」
⇒ この表現で適切か、だれを指しているのか、日本語教育の「対象」なのか。(川上2013)
- 子どもを取り巻く「今日的課題」(荒牧他2017)として
⇒ 学習権の確保、子どもの「貧困」etc
- パネルという形態を活かして
⇒ 知り合いたい／意見を交換したい／
今日と明日の実践について、考えたい



2. 事例報告

事例1:

「さぽうと21」より

事例2:

「豊島子どもWAKUWAKU

ネットワーク」より



3. まとめ

—改めて、課題は？—

- 2つの事例に

共通している点は？

異なっている点は？

- 私たちが、今、考えなければならない課題は？



3. まとめ

—改めて、課題は？—

- 背景事情や置かれている社会的文脈は異なるが、子どもにとっての困難は重層的であり、複合的である。
 - ⇒ 「今、ここ」にいる意味、
家族との関わり、
ネットワークとの関係、「見通し」等



3. まとめ

—改めて、課題は？—

- 学習支援の取り組みは「学力向上」のみならず、幅の広い視野に立ったものである。
 - ⇒ 「居場所」「つながり」の構築。
 - ⇒ 子どもは獲得した知識や技能を用いて、他者との関係のなかで生きていく。そのために主体性が尊重されている。



3. まとめ

—改めて、課題は？—

- ふたつの事例から見る「課題」と日本語教育との交差をはかるために
...「格差」は学力やリテラシー獲得に
影響を与えるか。(内田・浜野2012、内田2017)
- ⇒ 経済格差や文化資源の多寡より、大人の養育や保育の仕方が媒介要因となって学力格差が生まれる。
- ⇒ 対等な存在として、主体性を尊重する。

4. フロアとの協議

- ふたつの実践から見られる、
子どもたちが抱えさせられている
「ことばの問題」とは何か
- それに対して、日本語教育に何
ができるか
- 「生きる力を持つためのことば」
とは何か



★参考文献

- 荒牧重人・榎井縁・江原裕美・小島祥美・志水宏吉・南野奈津子・宮島喬・山野良一編著(2017)『外国人の子ども白書—権利・貧困・教育・文化・国籍と共生の観点から』明石書店
- 岩槻知也編著(2016)『社会的困難を生きる若者と学習支援—リテラシーを育む基礎教育の保障に向けて—』明石書店
- 内田伸子(2017)『発達心理学—ことばの獲得と学び』サイエンス社
- 内田伸子・浜野隆(2012)『世界の子育て格差—貧困は越えられる』金子書房
- 川上郁雄(2013)『「移動する子ども」という記憶と力』くろしお出版

